

日本における仏教と基督教の対話の歴史

イエンジエイチャック ユリア （ワルシャワ大学）

日本における基督教の歴史は良く知られている一方で、仏教と基督教の対話の歴史はそれほど研究されていない。基督教が最初に日本に伝わっていた頃にカトリックの宣教師が神様を「大日」と呼び、坊主がその名前を良く知っていたため、基督教に対して脅威を感じなかった。とはいえ、その後宣教師が神様を「デウス」と呼び始め、基督教は外国から来た危険な宗教として見られるようになった。1579年に約13万人の基督教への改宗者がいたと言われている。一般人だけでなく、何人かの大名さえ基督教徒になり、豊臣秀吉がこの状況について見つけたとたん、基督教が日本への重大な脅威であると考え、禁止することに決め、1587年に「バテレン追放令」を発令した。坊主は政府と協力し、数多くの基督教批判書を著した。一番人気のある排耶書は雪窓宗崔（1589–1649）の『対治邪執論』、鈴木正三（1579–1655）の『破吉利支丹』、浅井了意（1612–1691）の『鬼理至端破却論伝』などが挙げられる。本格的な宗教間対話が日本で始まったのは明治時代の頃である。日本の宗教間対話の起源である「宗教家懇談会」、「三教会同」、「帰一協会」、宗教間対話を進めた明治時代の様々な人物、そして宗教間対話の促進の背景にある社会的な不安定をさらに分析する必要があると言える。